

日本語と英語教育 におけるEメール交 換の実践と有効性

内田あゆみ

国際基督教大学

Ayumi Uchida

International Christian
University

森幸穂

青山学院大学

Sachiho Mori

Aoyama Gakuin University



Email exchange project in college foreign language classrooms

Reference data:

Uchida, A., & Mori, S. (2011). Email exchange project in college foreign language classrooms. In A. Stewart (Ed.), *JALT2010 Conference Proceedings*. Tokyo: JALT.

本稿では、米国州立大学の日本語コースの学生と日本の私立大学の英語コースの学生で行ったEメール交換の実践報告をし、その有効性と問題点を検証・考察する。本プロジェクトでは、両大学の学生をペアにし、興味のあることをそれぞれの学習言語で質問し、返信をもとに作文を書き、発表をした。終了時のアンケート調査によると、同世代の学生間のEメール交換がオーセンティックな外国語学習のためのコミュニケーションツールとなり、文化学習と自律学習を促すことが明らかとなった。一方、面識のない学生にEメール送信することへの不安やEメール交換が続かないなどの問題点もあった。これらの結果を踏まえ、今後の外国語学習におけるEメール交換の可能性と課題を考察する。

This paper reports the use and effects of email exchange between American and Japanese college students in foreign language classrooms. After introducing each other via email, students sent their email partner questions in their target language. After several email exchanges, each student wrote an essay based on the information they received from their email partner, and presented it in the class. The results of the questionnaires showed that this project played an important role for students of authentic foreign language learning. It was also successful in motivating students to write and read in their target languages, and having students deepen their knowledge about their target language culture and society. Finally, it was effective in enabling students to learn independently. A description of this email exchange project and a discussion of its advantages for adoption in the foreign language classroom environment are presented in this paper.

はじめに

近年、Eメール交換は外国語の授業に広く取り入れられ、言語学習への効果が明らかとなっている(Greenfield, 2003; Muehleisen, 1997; O'Dowd, 2003; Sakar, 2001; Vinagre, 2005)。コンピューターを利用したコミュニケーションは、学生の不安感を減らし(Kern, 1995; Sullivan, 1993)、モチベーションを高め(Warschauer, 1996a)、考える力(Warschauer, Turbee, & Roberts, 1996)と書く力(Cohen & Riel, 1989; Cononelos & Olivia, 1993; Warschauer, 1996b)を伸ばし、コミュニケーションを円滑にする(Cooper & Selffe, 1990)と言われている。O'Dowd (2003)が行ったEメール交換では、学生の異文化コミュニケーションと異文化交流の効果が明らかとなった。Sakar (2001)のEメール交換でも学生の異文化理解に対する積極的なコミュニケーションが見られ、さらに、学生の考える力を伸ばしたことも明らかとなった。Greenfield (2003)では、学生の言語学習への意識が変化し、モチベーションや興味が高まり、四技能に対する自信が増したと述べられている。さらに、日本人大学生による英語のEメール交換を行った研究でも、学習者の英語学習に対するモチベーションが高まり(Bourques, 2006; Matsuo, 2001)、英語に対する自信と書く力を伸ばす助けになることが明らかとなっている(Foss & McDonald, 2009)。

本稿では、このようなEメール交換の特長を踏まえ、2008年度秋学期に米国州立大学の日本語コースの学生と日本の私立大学の英語コースの学生がEメール交換プロジェクトを行った実践報告をする。また、学生のアンケート調査をもとに、Eメール交換の有効性と今後の課題を検証し考察する。

日米Eメールプロジェクトの概要

目的

日本の大学生は、高校までに学習した英文法や語彙を使い、実際に英語話者と英語でコミュニケーションを図る機会は少ない。米国の大学生も教室外で日本語話者と触れ合う機会は少ない。そこで、同世代である学生間でEメール交換をし、自分の聞きたいことを学習言語で質問し、教科書にはない生の返信メールを読むことで、学習言語でのコミュニケーションの楽しさを体験し、学習を促進することを目的とし、本プロジェクトを行った。

参加者とコース内容

日本の大学からは、81名が本プロジェクトに参加した。参加者は、必修科目であるCALLコースを履修している学生であり、全員1年生(男性36名、女性45名)であった。このCALLコースは、コンピュータ利用の外国語学習教室の機能を利用し、リーディング・ライティングを中心として総合的な英語力向上のための演習を行う授業であった。本プロジェクトはコースの中の一つのプロジェクトとして行った。

米国大学でも、中級日本語コースにおいてコース内の一つのプロジェクトとして本プロジェクトを行った。参加者は39名で、男性が20名、女性が19名であった。学年は1名が2年生、8名が3年生、25名が4年生、4名が大学院生であり、残りの1名は高校に在籍しながら大学の授業を履修している学生であった。

Eメールパートナーは、学生がメールで質問するトピックを考慮し、教師が適宜ペアを作成した。学生数に偏りがあった為、米国の学生1人に日本の学生2~3人を割り振りペアにし、米国の学生は2~3人の日本の学生それぞれとやりとりを行った。

日本の大学のプロジェクト内容

日本の大学のプロジェクトの流れと内容は以下のとおりである。

| | |
|-------------|---|
| 第1回 ~第2回 | <p><自己紹介文作成></p> <p>授業でクラスメートを知る活動を行い、それをもとに宿題として自分の自己紹介文を書く。自己紹介文は回収し、教師が添削し、学生が修正する。</p> |
| 第3回 | <p><質問文作成></p> <p>クラスを3グループに分け、各グループにトピック(例:米国の大学生生活)を与え、米国の学生に質問したいことを5つ考える。グループで作成した5つの質問の文法や語彙の間違い等をクラスで確認。その後、各自質問を3つ考える。</p> |
| 第4回 | <p><メール送信></p> <p>英語のEメールのフォーマットを導入し、自己紹介文と質問3つをEメールパートナーに送信。</p> |
| 第5回 ~第6回 | <p><返信メールに返信></p> <p>返信が来たか確認し、必要であれば催促メールを出す。返信には、お礼のメールを送信する。</p> |
| 第7回 ~第8回 | <p><作文></p> <p>返信を読み、宿題として作文を書く。作文には、パートナーの紹介、3つの質問の中で一番印象に残ったものの内容と、それが日本もしくは自分の考えと何が違うかもしくは同じか、さらになぜ印象に残ったのかを書く。作文は教師が添削し学生が修正する。</p> |
| 第9回 | <p><発表></p> <p>クラスでパートナーの紹介とメールの内容を共有する。スピーチ形式ではなく、作文をもとにCALL教室のヘッドセットを使用して、異なる学生5人に自分のプロジェクト内容について話す。評価は1) 伝えたいことが相手に伝わるか、2) 指示された情報が入っているか、3) 創造性とおもしろさを3段階で評価。</p> |



米国の大学のプロジェクト内容

米国の大学のプロジェクトの流れと内容は以下のとおりである。

| | |
|-----|--|
| 第1回 | <p>＜プロジェクトの説明＞</p> <p>目的、内容、流れを説明。作文のトピックと例を与え、その中から各自興味のあるトピックを選ぶよう指示。</p> |
| 第2回 | <p>＜質問文作成の導入＞</p> <p>「はい」「いいえ」で終わる質問や大きすぎる質問は避け、5W1Hの質問、個人の経験や意見を知ることができる質問、一般的な考えを知ることができる質問を考えるよう具体例を提示、指導。</p> |
| 第3回 | <p>＜質問文作成と添削＞</p> <p>宿題として、トピックとそのトピックに関する5つの質問を書き提出させる。教師は文法・表現の訂正に加え、質問に統一性があるか、多くの情報を得ることができる質問になっているか、日本人学生が答えやすい質問になっているかを確認、助言、評価。</p> |
| 第4回 | <p>＜自己紹介文と質問のメール送信＞</p> <p>日本語のEメールのフォーマットと表現を指導し、端末教室にて、自己紹介文と修正された質問を一斉送信。教師にもCCで送信させ、評価。</p> |
| 第5回 | <p>＜オンライン辞書を使ってメールを読む＞</p> <p>端末教室にて、オンライン辞書を紹介し、実際に使用させ、日本人学生からの自己紹介と質問の答えを読ませる。</p> |
| 第6回 | <p>＜作文の導入と下書き＞</p> <p>作文の構成、表現、評価方法の説明をし、宿題として日本人学生からの返信を元に作文の下書きを書く。必要に応じ、追加質問を送る。下書きは教師がコレクションコードで添削し、返却。</p> |
| 第7回 | <p>＜作文の送信＞</p> <p>構成を説明後、コレクションコードを見て修正した作文を日本人学生に添付ファイルとして送信。この際、日本人学生には作文を読みコメントを送ってもらうようお願いする。教師もメールを回収し、評価。</p> |
| 第8回 | <p>＜お礼メールの送信＞</p> <p>構成と表現の説明後、お礼メールを送信。教師にもCCで送信させ、評価。</p> |

アンケートの方法と内容

日本の大学では、2008年度秋学期終了時に本プロジェクトについてのアンケート調査を行った。質問は、1) Eメールプロジェクトはどうだったか、2) Eメールプロジェクトの何がよかったか、3) またEメールプロジェクトをやりたいか(資料1)であった。本プロジェクトが英語でのコミュニケーションを楽しむことを目的としていたことから、1)の質問では、Eメールプロジェクトが「楽しかった」「普通」「楽しくなかった」の3つの選択肢にし、その理由も書かせた。また、Eメール交換が英語学習にどのように反映されたかを知るために、2)の質問では、「英語の読み書きの練習ができた」「米国の文化が学べた」「米国人の友達ができた」の選択肢をもうけた。3)の質問では、学生の率直な意見から本プロジェクトの改善を目指す目的で、またEメールプロジェクトを「やりたかった」「やりたかったかわからない」「やりたくない」の選択肢を作り、その理由も書かせた。アンケートは、参加者全員81名の学生が答えた。アンケートの答えは日本語でも英語でもよいものとした。

米国の大学においてもプロジェクト終了時にアンケートを行った。アンケートでは、1を「まったくそう思わない」、5を「本当にそう思う」とした5段階評価で、1)Eメールプロジェクトが読解力・作文力を高めたか、2)日本文化・社会を理解するのに役立ったか、3)Eメールプロジェクト以前には知らなかったことを沢山学ぶことができたか、4)自分が選んだトピックは良かったか、について聞いた。次に、自由記述で5)一番難しかったこと、6)一番楽しかったこと、7) 気がついたことを書かせた(資料2)。合計39名がアンケートに答えた。答えは英語でも日本語でもよいものとした。

日本の大学の学生アンケート結果と考察

質問1)の結果を表1に示した。81人中70人が「楽しかった」と回答し、Sakar(2001)同様、Eメール交換が楽しく英語学習を行える活動であったことが明らかとなった。一方で「普通」と答えた学生が11人、「楽しくなかった」と答えた学生も3人いた。

表1. 「Eメールプロジェクトはどうだったか」の回答項目別人数

| 回答項目 | 人数 |
|---------|----|
| 楽しかった | 70 |
| 普通 | 11 |
| 楽しくなかった | 3 |



「楽しかった」と回答していた学生の理由の中でもっとも多かった意見は、米国の学生とEメール交流できたことや友達になれたからというもので、具体的には、以下の記述があった。

- 初めて米国の大学生と知り合った。メールで外国人とやりとりすることがないから楽しかった。

次に多かった理由は、米国について知ることができたからというものであった。その他、いい英語の勉強になった、楽しかったという以下のような回答もあった。

- 外国人との交流は英語力を鍛えるのによいと思う。
- 自分で英文を考えるのは難しかったけどメールのやりとりは楽しかった。

以上の結果から、学生はEメールを通して米国の大学生と交流を持ってたと感じており、それが楽しく、さらに米国について学んだと感じていることがわかった。その一方で、「普通」と答えた学生からは「返信メールを読むのが大変」、「外国人とメールできてよかったけど返事してもそれ以上の返事がなかった(涙)」等の意見があり、英文メールの読み書きの演習活動を再考することや、Eメール交換ができるだけ長く続けられるよう対策を考える必要性がみられた。

さらに、「楽しくなかった」の回答の理由には「I want to send email from mobile phone.」「I was slowly type.」「I am not Email very much.」「I don't like it and don't know Email partner.」のような記述があった。これらの記述は、少数ではあったが、再考の必要がある重要なポイントだと考えられる。タイプするのが遅い学生、Eメールをあまり利用しない学生、携帯電話でのメールを希望したい学生などに対処できるよう、テクニカル面の改善の余地があると感じた。また、「Eメールの相手を知らないので嫌だった」という意見からは、相手をもっと知りたいたいと思わせる動機付けの活動を見直す必要があることがわかった。

次に質問2)の結果を表2に示した。81人中40人が「英語の読み書きの練習ができた」と答えており、46人が「米国の文化が学べた」と回答していた。このことから学生は本プロジェクトが英語学習もしくは新しい文化を学ぶ経験になったと捉えていることがわかった。さらに、12人が「米国人の友達ができた」と回答しており、Eメール交換だけでも米国の学生との交流を感じられた学生がいることが明らかとなった。

表2.「Eメールプロジェクトの何がよかったか」の回答項目別人数

| 回答項目 | 人数 |
|----------------|----|
| 英語の読み書きの練習ができた | 40 |
| 米国の文化が学べた | 46 |
| 米国人の友達ができた | 12 |

注)複数回答可

質問3)では81人中65人が「またEメールプロジェクトをやりたい」と回答した。一方で、2人がプロジェクトをもうやりたくないと回答しており、14名が「わからない」と答えた。「またEメールプロジェクトをやりたい」と回答した学生の理由には以下の記述のような、三点があった。一点目はもっと米国について知りたいという意見、二点目はもっと米国人の友達や色々な国の人と話してみたい、三点目は英語学習の動機付けになったという意見であった。

- I want to know more American life.
- もっと多くの米国の大学生生活を知りたい。
- I want to make many American friends.
- おもしろかったからもっといろいろな国の人とメールしてみたい。
- It is interesting because I want to foreigner friends and study English.
- もっと英語をうまくしたい。

以上の結果より、本プロジェクトは学生にとって「英語を勉強する」のではなく「英語を使って新しいことを知りたい」と思うきっかけとなったのではないかと考えられる。その一方で、「またEメールプロジェクトをしたいかわからない」と答えた学生の理由として、「楽しいけど面倒」があり、「もうEメールプロジェクトをしたくない」と回答した学生の理由は「タイプするのが遅いから」というものがあり、テクニカル面でのサポートやプロジェクトを行う手順には改善の余地があることがわかった。

米国の大学の学生アンケート結果と考察

5段階で評価した質問1)から4)の結果を表3に示した。



表3. Eメールプロジェクト終了時に行ったアンケートの質問別平均値

| 質問 | 平均値 |
|---------------------------------------|------|
| 1) Eメールプロジェクトが読解力・作文力を高めたか | 4.27 |
| 2) 日本文化・社会を理解するのに役立ったか | 3.86 |
| 3) Eメールプロジェクト以前には知らなかったことを沢山学ぶことができたか | 3.59 |
| 4) 自分が選んだトピックは良かったか | 3.57 |

まず、質問1)の平均値は4.27で、他の質問よりも数値が高かった。このことより、教科書や授業内で扱う読み物とは違い、未習の文型・語彙・漢字などが使用されている日本人学生のメールを読むことは、読解力を高めるのに効果があると多くの学生が考えていたことがわかった。また、メールを書き、最後に作文を書くことが、作文力向上に役立ったと考えていたことがわかった。書き手・読み手が教師ではなく、日本人学生であったことで、通常の活動より負担も大きかったが、その分、読解力・作文力向上につながったと感じていることがわかった。

次に、質問2)の平均値は3.86であった。同世代の日本人学生に質問をすることで、通常授業では学べないことが学べ、文化・社会を理解するのに役立ったと思った学生が多かったことがわかった。しかし、既にある程度の知識があることについて質問をした学生や、あまり日本文化・社会とは関係のないことについて質問をした学生はEメール交換を通して日本文化・社会を理解したと思えなかったようである。

質問3)の平均値は3.59であった。沢山学ぶことができなかったと回答した学生の理由は質問2)と同様のことが考えられる。このことから、トピック・質問選びが、新しい知識を得ることができるかどうか大きく影響することが明らかになった。

質問4)の平均値は3.57で、他の質問に比べ、数値が低かった。トピックは学生に自由に選ばせたが、実際に質問をし、そのトピックが、日本人学生にとって答えやすく、多くの情報を得ることができ、作文にしやすいトピックではなかったと感じた学生が多かったことがわかった。質問2)と3)で低い数値をつけた学生は4)でも低い数値をつけており、やはりトピック選びが重要であることがわかった。

次に、質問5)の結果を表4に示した。

表4. 「Eメールプロジェクトで一番難しかったことは何か」の回答項目別人数

| 回答項目 | 人数 |
|-----------------------|----|
| Eメール・作文を書くこと | 11 |
| Eメールを読むこと | 8 |
| 返信を待つこと | 7 |
| トピックと質問を考えること | 5 |
| 知らない人にEメールを書き、質問をすること | 2 |

注) 複数回答可

11名が「Eメール・作文を書くこと」と回答している。回答理由には以下のようなものがあった。

- ・ 失礼のない丁寧な日本語で書くのが難しかった。
- ・ 自分の意見を作文に書くのが難しかった。

次に、8名が「Eメールを読むことが難しかった」と回答していた。通常の授業内で使用する教材と異なり、日本人学生からのメールには未習の文法・語彙・漢字が多く使用されており、それらを調べ理解するのに時間がかかったようである。

次に多かった回答は「返信を待つこと」であった。本プロジェクトでは、作文執筆の際に日本人学生からの質問に対する答えが、お礼のメール作成の際には日本人学生からの作文に対するコメントが必要とされたが、学生によっては返信が来ず、期日通りに完成することができなかったようである。

次に多かった回答は、「トピックと質問を考えること」であった。トピックと質問の導入には時間を割いたが、その段階ではまだパートナーについての情報が一切知らされておらず、年齢や趣味や性別がわからない日本人学生に対する質問を考えるのは難しかったようである。最後に、2名が面識のない人に突然Eメールを送り、質問することに抵抗を感じたと回答した。

次に質問6)の結果を表5に示した。

表5. 「Eメールプロジェクトで一番楽しかったことは何か」の回答項目別人数

| 回答項目 | 人数 |
|-----------------------|----|
| 日本人学生と交流すること | 13 |
| 日本人学生からのEメールを読むこと | 13 |
| 日本語・日本文化・日本社会について学ぶこと | 6 |
| Eメールを書くこと | 2 |



| 回答項目 | 人数 |
|--------------------------|----|
| 日本語でレポートを書く力があると分かったこと | 1 |
| 日本語のEメールを理解する力があると分かったこと | 1 |
| 日本語について日本人学生からコメントをもらうこと | 1 |

一番多かった回答は「日本人と交流すること」と「日本人学生からのEメールを読むこと」で、各13名いた。回答例としては以下のようなものがあった。

- Reading the emails I got back and corresponding with my mail partners was incredibly fun!

次に、6名が「日本語・日本文化・日本社会について学ぶこと」、2名の学生が「Eメールを書くこと」が楽しかったと回答した。最後に、1名ではあるが、「日本語でレポートを書く力があると分かったこと」、「日本語のEメールを理解する力があると分かったこと」と回答しており、本プロジェクトの活動が、自己の学習を振り返り、成長を確認し、自信に繋がる機会になっていたことがわかった。

最後に質問7)でEメールプロジェクトの感想やコメントを書かせたところ、日本人学生と交流ができてよかった、日本語力向上につながったという感想が一番多かった。また、質問6)の回答にもあったが、学習の成長を確認することができたという、次のような記述もあった。

- I noticed how far my ability to write in Japanese has come. About a year ago I was struggling to make sentences and now I can write papers over one page in length.

今後の課題

今後の課題は、「楽しい」Eメールプロジェクトをきっかけに、いかにメール交換を続けさせ、学習言語力の向上に影響を与えるかである。そのためには、活発なメール交換とパートナーとの関係作りが必要だと考える。突然面識のない人にEメールを送信することが難しかったという意見もあったことから、質問を送信する前に、最初の数回は教師がトピックを出し、お互いについて知り、その後のメール交換の動機付けに努める。例えば、自己紹介から始まり、大学、クラブ活動、アルバイト紹介など、自分達のことを紹介し相手を知り合う。お互いのことがわかった後であれば、Eメール交換も活発に続けられるのではないかと考える。

さらに、学生をグループにし、Eメール交換させ、協同学習の活動にすることも考えられる。グループで活動することにより、一人で読むのが困難な返信メールもグループで助け合って読むことができ、一人では思い浮かばない質問や答えもグループで考えることにより、より深い討論ができ、楽しくメール交換ができるのではないかと考える。以上のように、Eメール交換をする動機付けと協同学習により、活発なメール交換とパートナーとの関係作りができれば、プロジェクト終了後もメール交換を続ける学生が増えるのではないかと考える。

更に、トピックと質問を考えることが難しかったという意見を受け止め、改善するため、またトピックと質問がプロジェクトの成功の鍵を握っていることから、トピックを選ぶ際のブレインストーミングにより時間をかけ、よりよいトピック、質問を考えられるよう工夫が必要である。

また、本プロジェクトは負担が大きすぎたと感じた学生もいたことから、パートナーに難易度の高い語彙や複雑な表現の使用は避けるようお願いするなどして、より学生がプロジェクトを楽しめるよう改善する必要がある。ただ、本プロジェクトの目的は生の学習言語に触れコミュニケーションを図ることであるため、どの程度お願いをするか慎重に考えなくてはならない。

まとめ

本稿では日米の大学で行われたEメール交換の実践報告をし、その有効性と問題点を検証・考察した。アンケート結果から、Rooks(2008)の研究結果同様、日米両国の学生がEメール交換を通しての交流を楽しみ、学習言語社会・文化について知識を深められたことが伺える。さらに、本プロジェクトが学習言語を勉強するのではなく、学習言語を使って新しいことを知りたいたいと思うきっかけとなったように思われる。また、本プロジェクト終了後もEメール交換を続けている学生がおり(Rooks, 2008)、本プロジェクトが教室外での自律学習を促進するきっかけにもなったようである(Matsuo, 2001)。更に、Foss and McDonald (2009)の研究結果同様、Eメール交換を通し、学生が生の学習言語の難しさを感じながらも、コミュニケーションを図ることができるレベルに達していることを認識するよい機会にもなったようである。また、本プロジェクトではお互いが学習言語でEメールのやり取りをしたことで、日米両国の学生の学習言語に有効であったと考える。さらに、本プロジェクトは、学生に自己の学習を振り返らせ、成長を認識させる機会となり、更なる向上を目指すモチベーションになったのではないかと考える。



Bio data

Ayumi Uchida is currently an instructor at International Christian University, where she teaches Japanese language.

<auchida@nt.icu.ac.jp>

Sachiho Mori is currently an instructor at Aoyama Gakuin University, where she teaches Japanese language.

<smori@cc.aoyama.ac.jp>

引用文献

- Bourques, M. (2006). Epals to motivate students: How a fully integrated email exchange can help motivate low-level students. *The JALT CALL Journal*, 2(3), 15-28.
- Cohen, M., & Riel, M. (1989). The effect of distant audiences on students. *American Educational Research Journal*, 26(2), 143-59.
- Cononelos, T., & Oliva, M. (1993). Using computer networks to enhance foreign language / culture education. *Foreign Language Annals*, 26, 252-34.
- Cooper, M. M., & Selfe, C. L. (1990). Computer conferences and learning: Authority, resistance, and internally persuasive discourse. *College English*, 52(8), 847-873.
- Foss, P. & McDonald, K. (2009). Intra-program email exchanges. *CALL-EJ Online*, 10(2). Retrieved from <<http://www.tell.is.ritsumei.ac.jp/callejonline/journal/10-1.html>>.
- Greenfield, R. (2003). Collaborative Email exchange for teaching secondary ESL: A case study in Hong Kong. *Language, Learning & Technology*, 7, 46-70.
- Kern, R. (1995). Restructuring classroom interaction with networked computers: Effects on quantity and characteristics of language production. *Modern Language Journal*, 79, 457-476.
- Matsuo, M. (2001). Effectiveness of Email Exchange in EFL Classroom. *PAC3 at JALT 2001 Conference Proceedings*, 724-730
- Muehleisen, V. (1997). Projects using the internet in college English classes. *The Internet TESL Journal*, 3(6). Retrieved from <<http://iteslj.org/Lessons/Muehleisen-Projects.html>>.

O'Dowd, R. (2003). Understanding the "other side": Intercultural learning in a Spanish-English Email exchange. *Language Learning & Technology*, 7, 118-144.

Rooks, M. (2008). A Unique Opportunity for Communication: An Intercultural Email Exchange Between Japanese and Thai Students. *CALL-EJ Online*, 10(1). Retrieved from <<http://www.tell.is.ritsumei.ac.jp/callejonline/journal/10-1.html>>.

Sakar, A. (2001). The cross-cultural effects of electronic mail exchange on the Turkish University students of English as a Foreign Language. *CALL-EJ Online*, 3, 1. Retrieved from <<http://www.tell.is.ritsumei.ac.jp/callejonline/journal/3-1.html>>.

Sullivan, N. (1993). Teaching writing on a computer network. *TESOL Journal*, 3(1), 34-35.

Vinagre, M. (2005). Fostering language learning via email: An English-Spanish exchange. *Computer Assisted Language Learning*, 18(5), 369-388.

Warschauer, M. (1996a). *Motivational aspects of using computers for writing and communication*. Honolulu: University of Hawaii, Second Language Teaching & Curriculum Center.

Warschauer, M. (1996b). Computer-assisted language learning: An introduction. In S. Fotos (Ed.), *Multimedia language teaching* (pp. 3-10). Tokyo: Logos International.

Warschauer, M., Turbee, L., & Roberts, B. (1996). Computer learning networks and student empowerment. *System*, 24(1), 1-14

資料 1

日本の学生使用アンケート

1. How was the Email project?

Fun

OK

Not fun

Why is it? ()



2. What was good for you about the email project?

- Can practice reading and writing English
 Can learn American cultures
 Can make an American friend

3. Do you want to participate in an email project again?

- Yes
 I do not know.
 No

Why is it? ()

資料 2

米国の学生使用アンケート

NOT AT ALL <-----> DEFINITELY

1. Does this email project help you improve your reading and writing skills in Japanese?

1 2 3 4 5

2. Does this email project help you understand Japanese culture/society?

1 2 3 4 5

3. Do you think you learned many things which you didn't know before this email project?

1 2 3 4 5

BAD <-----> GREAT

4. What do you think about the topic you chose?

1 2 3 4 5

Write your topic: _____

5. What was the most difficult part of this email project?

6. What was the most enjoyable part of this email project?

7. Please write down anything you noticed or thought about this email project.

